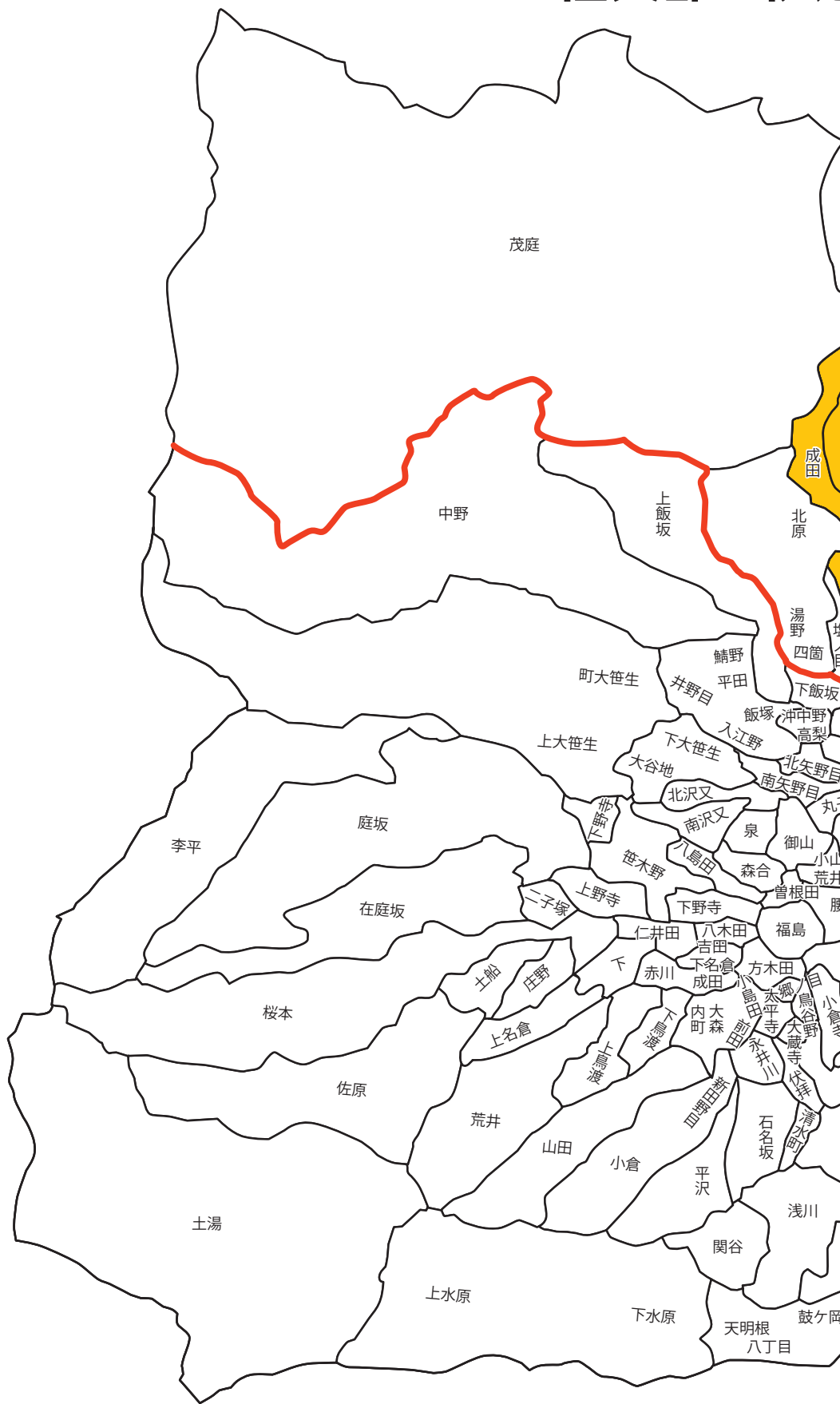


ふくしま歴史絵巻



福島市

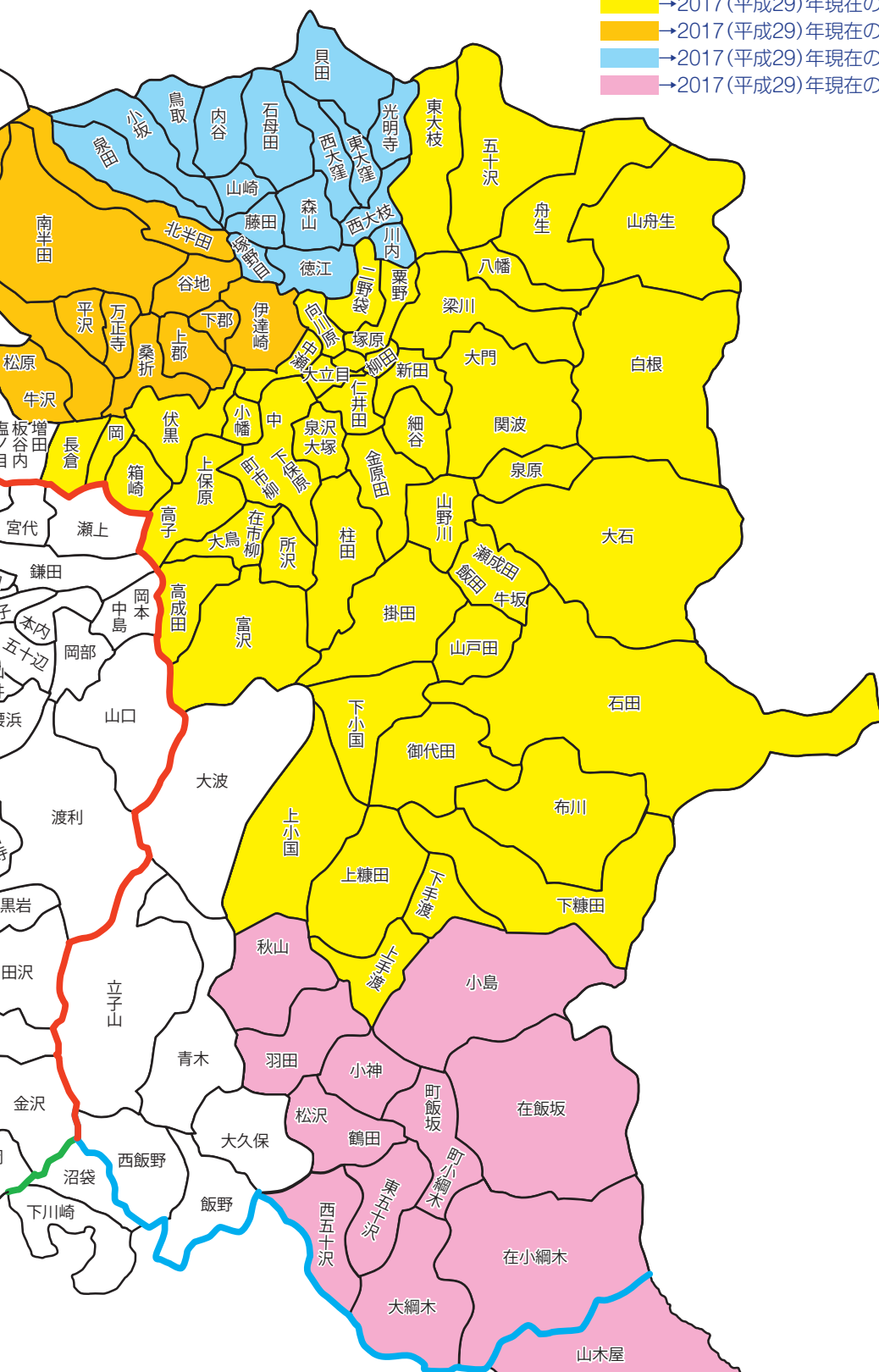
信夫郡・伊達



凡 例

- 1 地図中の村名は、『旧高旧領取調帳』により、1868(明治元)年現在のものです。
- 2 郡境は、1890(明治23)年の郡制施行時のものです。
- 3 赤い線は信夫郡と伊達郡、緑色の線は信夫郡と安達郡、青色の線は伊達郡と安達郡との境界線です。
- 4 1889(明治22)年の市制、町村制施行前に合併した旧村間の境界は資料不足により表すことができず、一領域内に複数の村名を置きました。
- 5 現在の自治体は、下の色別としました。

 → 2017(平成29)年現在の福島市
 → 2017(平成29)年現在の伊達市
 → 2017(平成29)年現在の伊達郡桑折町
 → 2017(平成29)年現在の伊達郡国見町
 → 2017(平成29)年現在の伊達郡川俣町



ふくしま

歴史絵巻

は じ め に

市制施行110年の記念すべき年(平成29年)に、市民の皆様に福島歴史を見つめ直し、その魅力を再発見していただくため、故郷の歴史を分かりやすく学ぶことのできる『ふくしま歴史絵巻』を発行いたしました。

その土地の気候風土の中で形成されてきた歴史と文化には、人々に元気を与え、地域社会を活性化する力があり、歴史を見つめ直すことにより新たな物語が生まれます。

宮畑遺跡に代表される縄文時代の人々の生活や、『平家物語』にも描かれた信夫庄司佐藤氏の活躍、近世以降の養蚕業の繁栄など、福島の風土の中で暮らした人々の足跡の上に現在の福島市があります。この土地に生まれてきた人々の営みに誇りを持ち、自信をもって次の世代に伝えとともにまちづくりに活かしていくことが現代を生きる私たちの務めであると言えます。

現在、本市では、市民との共創により、県都ふくしまの姿として「人・まち・自然が奏でるハーモニー 未来協奏(共創)都市～世界にエールを送るまち ふくしま～」を目指し、各種事業に取り組んでいます。まちづくりの原点は、連綿と受け継がれてきた豊かな歴史と文化の理解を通して郷土の魅力を再発見することで、自らが生まれた土地に対する自信や愛着を持つことにあると考えています。

本書が、先人が築き上げてきた本市の歴史を見つめ直し、新たなふくしまの創造に向けた契機となることを祈念します。

令和 5年 6月

福島市長 木 幡 浩

発行によせて

本市教育委員会は、先人が築いた歴史や文化を基盤として「心ふれあう教育と文化のまちづくり」を推進しています。市民の皆様に故郷の歴史を見つめ直し、故郷の魅力を再発見していただくとともに、本市の歴史を全国に発信するため、『ふくしま歴史絵巻』を発行いたしました。

本書は、福島市を語るうえで欠かすことのできない歴史や文化を基軸としながら、故郷の発展に貢献した先人たちの業績なども紹介しています。

また、本文は、小・中学生でも理解できるように平易な表現で書かれており、先人たちから受け継いできた本市の文化財等の写真や、分かりやすい図版等を豊富に取り入れるなど、幅広い世代の皆様に読みやすい内容となるよう努めました。

ぜひ、多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

本書を刊行するにあたり、ご多忙中にも関わらずご指導を賜りました福島市史編纂委員の皆様をはじめ、ご協力をいただきました関係各位に心より感謝を申し上げます。

この『ふくしま歴史絵巻』を通して、多くの皆様が福島市の魅力に気付いてくださるとともに、市民の皆様が故郷に対してさらなる誇りと愛着を持ってくださることを期待しています。

平成 29年 3月

福島市教育委員会 教育長 本 間 稔

凡 例

- 1 本書は、福島市の歴史や文化などを分かりやすくまとめたものです。
- 2 掲載しているテーマ及びトピックは、目次のとおりです。
- 3 見開き2頁^{ページ}で1テーマ又は1トピックを完結しています。
- 4 伝説や言い伝えなど史実として確認できない内容は、トピック及びコラムに掲載しました。
- 5 福島市内の現地名は、福島市が市内の字名を一覧にまとめた『地区分類表』によりました。
- 6 掲載の範囲は、福島市域を中心としていますが、必要に応じて近隣地域についてもふれました。
- 7 本書で「信達^{しんたつ}」とは、「信夫郡」と「伊達郡」を併せた地域を言います。現在の自治体に対照すると「福島市(松川町下川崎、松川町沼袋を除く)、伊達市、桑折町、国見町、川俣町(山木屋を除く)」になります。

なお、郡制が施行された1890(明治23)年時点での郡域を基にしています。見返しに掲載の「信夫郡・伊達郡と福島市」も参照してください。
- 8 固有名詞などにルビを付ける場合、見開きで複数出て来るときには、初出のものだけにルビを付けました。
- 9 書名には『 』を付けました。
- 10 本文中の氏名の敬称は省略しました。
- 11 付近図の見方は、次のとおりです。
 - ・建物を掲載した場合は、原則として国土地理院の地図記号に準じましたが、特に国土地理院の地図記号がない建物を掲載した場合には、・に名称を付けました。
 - ・ガソリンスタンドはⒸ、信号機は🚦と掲載しました。
 - ・目標は青点で示しましたが、特に遺跡や古墳は青丸などで囲みました。

ふくしま歴史絵巻 もくじ

テーマ1	ふくしまのあけぼの	2
テーマ2	ふくしまの縄文人～宮畑遺跡と和台遺跡～	4
テーマ3	米作りが始まったふくしま	6
テーマ4	古墳が造られた頃	8
テーマ5	信夫郡の寺	10
テーマ6	古代の祈り 大蔵寺の仏像と天王寺陶製経筒	12
トピック1	信夫の里	14
トピック2	王老杉・阿倍晴明・杉妻莊	16
トピック3	佐藤継信・忠信と奥州藤原氏	18
テーマ7	石那坂の戦い・阿津賀志山の戦い ～佐藤基治と奥州藤原氏～	20
テーマ8	伊達氏の移住と歴代伊達氏ゆかりの地	22
テーマ9	信夫武士団と南北朝の戦い～霊山を中心に～	24
テーマ10	戦と祈りの時代	26
トピック4	椿館と安寿と厨子王伝説	28
トピック5	福島市のシンボル 信夫山物語	30
トピック6	豊饒への祈り	32
テーマ11	伊達政宗の南東北統一と豊臣秀吉	34

テーマ12	「福島」の誕生と松川の合戦	36
テーマ13	交通の整備 街道と舟運	38
テーマ14	西根堰の開鑿と耕地の拡大	40
テーマ15	福島藩の成立と代官・小藩の支配	42
テーマ16	揺れ動く封建制～百姓一揆と天明の飢饉～	44
テーマ17	城下町福島の賑わい	46
テーマ18	庶民の愉しみ～文学の旅と信仰の巡り～	48
トピック7	和算の発達	
	～世界水準の数学と実用の学としての和算～	50
トピック8	奥州蚕種本場から日本の花形産業へ	52
テーマ19	世直し一揆と戊辰戦争	54
テーマ20	三島通庸と自由民権運動	56
テーマ21	甚兵衛火事からの復興と福島町の整備	58
テーマ22	交通網の整備	60
テーマ23	教育制度の整備	62
テーマ24	福島市の誕生と大正期の賑わい	64
テーマ25	金融恐慌・世界恐慌そして戦争へ	66
テーマ26	戦後の生活と高度経済成長	68
テーマ27	現代の福島市	70
トピック9	福島市とくだもの	72

旧石器時代の人々の痕跡：学壇遺跡(黒岩)

注1

福島市で最も古い人々の生活の跡は、学壇遺跡で約2万年～1万年前の石器が発見されています。尖頭器(やり)、ナイフ形石器(動物の肉を切る道具)、細石刃(狩りの道具として用いた溝を刻んだ棒にはめ込む小さな石)などがみつかっています。フランスでは約2万年前にラスコーの壁画が描かれています。

石器とともに、それを作る時に出る石の破片が多く見つかった、石器を製作したと考えられる場所が62か所で確認されています。

桑折町の平林遺跡では、学壇遺跡の石器より古い約3万年前の石器が発見されています。



学壇遺跡付近図



1. 石器製作の跡 箸が立っているところが石器と石器を作る時にした細かな石の破片の場所。



2. 学壇遺跡で発見された石器 右2点がナイフ形石器、左4点が細石刃。(市蔵)

縄文時代の始まり：南諏訪原遺跡(松川町)

みなみす わはらいせき

南諏訪原遺跡から発見された右頁の写真の縄文土器は、横方向に細い粘土が貼り付けられた微隆起線文土器です。

このような特徴の土器は1万2000～1万年前の縄文時代のはじめ頃に使われたもので、市内で発見された最も古い土器です。



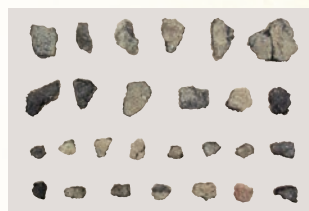
南諏訪原遺跡付近図

注1 旧石器時代 縄文土器が出現する以前の石器が主な道具の時代。
注2 微隆起線文土器 土器の上半部に粘土の帯をめぐらせた土器。縄文時代はじめに使われ、使われた時代が新しくなるほど粘土の帯が細くなる。

日本最古の土器は、青森県大平山元遺跡^{おおだいやまもと い せき}で発見された約1万6000年前の文様がな^{もんよう}い^{む もん ど}無文土器^きと呼ばれるものです。氷河期^{ひょう が き}が終わりに近づき、木の実^{まきのみ}がなる環境^{かんきよう}に変化し始めた時期に、土器は木の実^にを煮てアク抜きをする容器として出現したと考えられています。



3. 南諏訪原遺跡の微隆起線文土器
断面三角形の紐状の粘土6本が表面に貼り付けられている。底は丸底で砲弾を逆さにした形と考えられる。(市蔵)



4. 大平山元遺跡の土器
(青森県外ヶ浜町教育委員会蔵、提供：青森県外ヶ浜町教育委員会)

市内最古の家：仙台内前遺跡^{せんだいうちまえ い せき}(松川町水原)

仙台内前遺跡^{だ えん け い}の長さ4m、幅3mの楕円形に地面^ほを掘りくぼめた^{たてあなじゆうきよ}竪穴住居が市内最古のものです。科学分析^{ぶんせき}により約1万年前のものであると確認されました。柱をすえた穴は9個あり、直径約10cmの柱が使われていました。

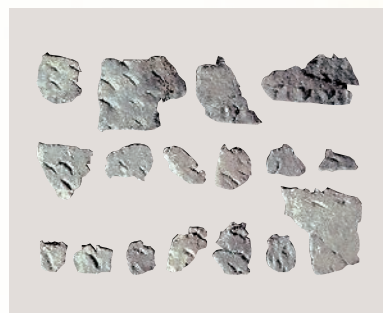
竪穴住居^{どう}は1棟のみ確認され、他に同時代の石器^{あと}を製作した跡などが発見され、縄文土器や石器が出土しています。



仙台内前遺跡付近図



5. 竪穴住居跡 地面を浅く掘りくぼめて柱を立てたものでテントのような構造であったと考えられる。



6. 竪穴住居周辺で発見された土器
爪のあとが文様になった爪型文土器^{つめがたもん ど}と呼ばれる。(県指定重要文化財、市蔵)



7. 竪穴住居の周辺で発見された石器 右の磨製石斧^{ませいせきふ}は長さ25cm。(県指定重要文化財、市蔵)

コラム 竪穴住居の出現

竪穴住居は、木の実が主な食糧となった縄文時代になり一般化します。縄文時代になると気候が温暖になったため、木の実などの食糧が移動しないでも確保できるようになり、人々は竪穴住居に住み、むらを作って、定住生活が始まりました。

2つの謎があるむら：宮畑遺跡(岡島)国指定史跡

縄文時代中期の中頃(約4500年前)から縄文時代晩期の中頃(約2500年前)までの3時期のむらや掘立柱建物群が発見されています。

縄文時代中期のむらでは約半数の土屋根の竪穴住居が焼かれています。土屋根の竪穴住居は燃えにくいのににもかかわらず、これだけ多くの竪穴住居を焼いた縄文のむらは、全国でも例がありません。

縄文時代晩期には、広場を囲んで掘立柱建物が4か所で建てられ、掘立柱建物の中には、全国でも最大級の直径90cmの柱を使ったものがあります。直径90cmの柱は、南東北では他に発見された例がありません。

縄文時代中期に半数近くの竪穴住居を焼いた理由を示す痕跡がなく、焼く家を選んだ訳は謎となっています。晩期の直径90cmの柱の掘立柱建物は、その規模からまつりに関する特別な建物である可能性があります、これだけ太い柱を使った理由は不明です。



宮畑遺跡付近図



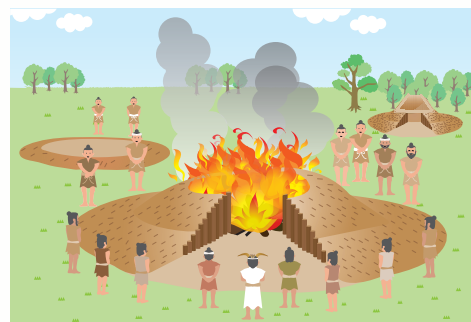
8. 復元した直径90cmの柱の掘立柱建物 1本の柱の重量は3tを超える。縄文時代晩期の頃ギリシャでは第1回古代オリンピック競技会が開催された。



9. 復元した竪穴住居 屋根の木組みの上に土をのせている。



10. 焼かれた竪穴住居跡 焼けて赤くなった土がたまっている。



11. 中期の家を燃やす 何らかの理由で使わなくなった家を神に返す「送り」の儀式と考えられる。

コラム 縄文時代の竪穴住居と掘立柱建物

竪穴住居は、住まいとなる直径4～5mの穴を掘り、地面より低いところで生活します。掘立柱建物は、柱を埋める穴の部分だけを掘り柱を立てるため、右の写真のように生活するところは地上です。

竪穴住居は住まいですが、掘立柱建物は住まい、倉庫、まつりの施設などに用いられました。掘立柱建物はすべてのむらにあるものでなく、掘立柱建物がないむらも存在します。



12. 復元した掘立柱建物(宮畑遺跡)

コラム 縄文人の祈り～上岡遺跡で発見された土偶～

右の土偶は、1952(昭和27)年に飯坂町東湯野の畑から発見されたもので、国の重要文化財に指定されています。腕を組んで座る姿から「しゃがむ土偶ぴ〜ぐ〜(上岡遺跡出土)」と表現されています。高さ21cmで、同様のポーズの土偶は青森県や宮城県、島根県で発見されています。妊娠した女性を表現しており、お産の様子ないしはまつりのポーズを表現しているとされ、むらで行われたまつりに使われたものと考えられます。

13.しゃがむ土偶ぴ〜ぐ〜(上岡遺跡出土)
縄文時代後期(国指定重要文化財、市蔵)



ふくしきろ 複式炉のむら：和台遺跡(飯野町)国指定史跡

中心の広場を囲むように倉庫と考えられる掘立柱建物と竪穴住居、食糧である木の実を貯蔵する穴の場所が定められた、縄文時代中期の終り頃(約4200年前～4000年前)の計画的なむらが発見されています。竪穴住居には、調理、照明、暖房のために火を燃やす場所として用いられた複式炉があります。竪穴住居跡は234棟が発見され、この時期のむらでは福島県内最多の数です。

和台遺跡からは、縄文人がまつりで使った土器に人の全身を表現した人体文土器と縄文人の狩りの様子を表現した狩猟文土器が発見され、いずれも県の重要文化財に指定されています。



和台遺跡付近図



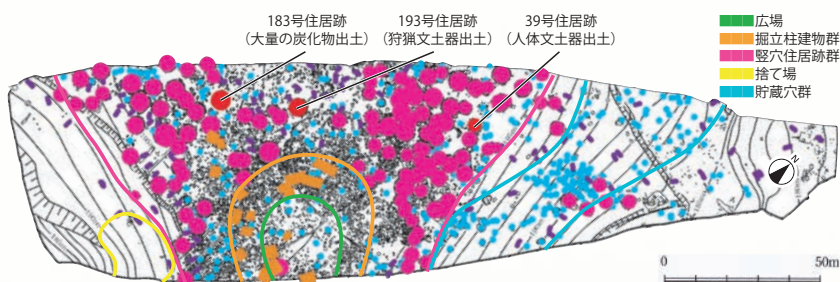
15.人体文土器
人は全身約20cm。
(県指定重要文化財、市蔵)



16.狩猟文土器 中央に動物、左に弓と矢、右に人の手足が表現されている。
(県指定重要文化財、市蔵)



17.狩猟文土器拡大図



18.和台遺跡のむらの構成 径25mの広場を掘立柱建物群が囲み、その外側に竪穴住居跡群が配置されている。



14.竪穴住居跡 直径約4mで、中央下側に複式炉が造られている。複式炉が用いられた頃、エジプトではピラミッドが造られた。



19.複式炉 石を敷き並べた部分と土器を埋めた部分からなっている。昭和32年に飯野町白山遺跡の調査で発見された同じ形態の炉を複式炉と名づけた。

弥生時代の水田跡：台畑遺跡(丸子・南矢野目)

九州北部で米作りが約2600～2500年前に始まりました。米作りを始めたむらでは、大陸系磨製石斧や環濠集落など朝鮮半島から伝来したものがみつかり、米作りは朝鮮半島から渡って来た人々によって伝えられたと考えられます。

米は毎年作ることができ、収穫量も多いことから、米作りにより安定的に食糧を得ることができるようになりました。生活

は米作り中心になり、稲や水路の管理などが年間を通してむらの共同作業で行われるようになりました。現在も行われている春の田植え祭りや秋の収穫祭などのまつりも米作りとともに行われるようになったと考えられます。

福島市内では台畑遺跡で弥生時代の中頃(約2000年前)の水田跡が発見されています。他の遺跡でも弥生時代に米の収穫に使用した石包丁が発見されており、福島市内でも弥生時代に米作りが行われたことがわかります。



台畑遺跡付近図



20. 台畑遺跡の弥生時代水田跡

1枚の水田面積は1.9～11.3㎡で小区画水田と呼ばれる。1枚の平面の形が三角形・四角形・台形・平行四辺形とさまざま、地形に合わせて作っている。

小区画水田は古墳時代まで使われたが、水温管理、水田面の平坦化が容易で少人数作業に適していることから用いられた。



21. 石包丁

勝口前畑遺跡(野田町・八島田)出土。横の長さ16.5cmでひもを通す穴が2個あいている。(市蔵)

22. 弥生時代の稲刈りの様子

収穫は石包丁を手に持ち穂の部分刈り取った。



コラム 弥生時代の調理

弥生土器は、縄文土器より薄く熱がよく伝わります。上東遺跡(岡山県)の弥生土器28個のうち10個にふきこばれ痕があり、炊飯に用いられたことがわかっています。

炊飯方法は、「①土器に米と水を6割以上入れ」、「②土器の上端までですがつくような炎でふきこばれるように加熱し」、「③その後弱火で水分を含んだ状態で蒸らす」ようにしたようです。

土器内面の底付近にはこげが確認されており、やや固めのかゆであったと考えられます。

小型の弥生土器でも調理の痕跡があり、おかずの調理が行われたと考えられ、「米とおかず少なめ」の食事だったようです。

米を食べるようになってからもドングリやクルミ・クリ・トチも主食の一つで、アワ・ヒエ・ムギ・ウリ・シソやアズキ・ダイズなどの豆類も栽培されていました。

『魏志』「倭人伝」には「倭地温暖 冬夏食生菜」とあり、邪馬台国では冬でも夏でも生野菜を食べていると書かれています。また、「食飲用籩豆手食」とあり、高杯に盛った食べ物を手づかみで食べていたようです。

まがたま 勾玉作りの場：勝口前畑遺跡(野田町・八島田)

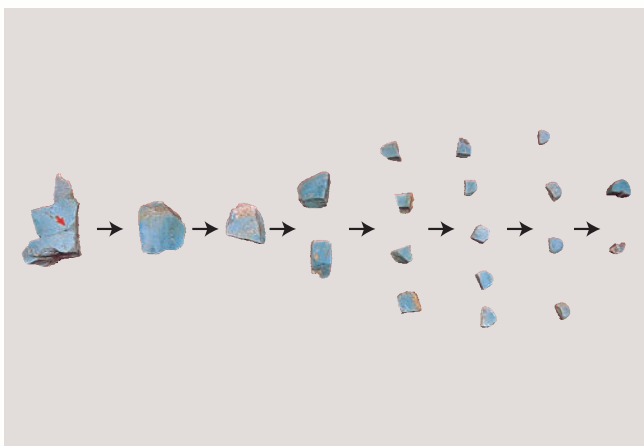
弥生時代の勾玉製作途中の石と製作に使用した道具が発見され、福島市内で勾玉作りが行われたことが明らかになりました。勾玉は約1cmの半円形にくぼみをつけた形で、最後に穴をあけて完成させたと考えられます。弥生時代には装身具として玉が使われ、日本海側では細長い円柱形の管玉が数多く使用されます。

これに対し、天神原遺跡(檜葉町)の墓では勾玉が多く発見されて



勝口前畑遺跡付近図

おり、福島県内の弥生時代のむらでは勾玉を使用することが多かったようです。製作時に出る石の破片の量からすると勝口前畑遺跡の勾玉は交易のために作られたものでないことから、この場所は、周辺のむらで使う勾玉を製作した場所と考えられます。



23. 勾玉の製作工程 四角く整えた石を半分に割ることを繰り返し、1辺1cmの四角にした後に半円形に形を整えている。完成品は右の檜葉町天神原遺跡の勾玉の形になる。(市指定有形文化財、市蔵)



24. 檜葉町天神原遺跡の勾玉と管玉 左下の細い円柱形が管玉。勝口前畑遺跡では天神原遺跡と同じ形の勾玉が作られていた。(提供：福島県立博物館、檜葉町所蔵)

5世紀の古墳：稲荷塚古墳(下鳥渡)

3世紀に奈良県桜井市で箸墓古墳が造られます。

その後各地で箸墓古墳と同じ形態の前方後円墳が造られ、5世紀には岩手県から鹿児島県まで前方後円墳が広がります。

福島市では5世紀に稲荷塚古墳が造られました。全長53mの帆立貝の形をした古墳で、時期は5世紀後半と考えられています。

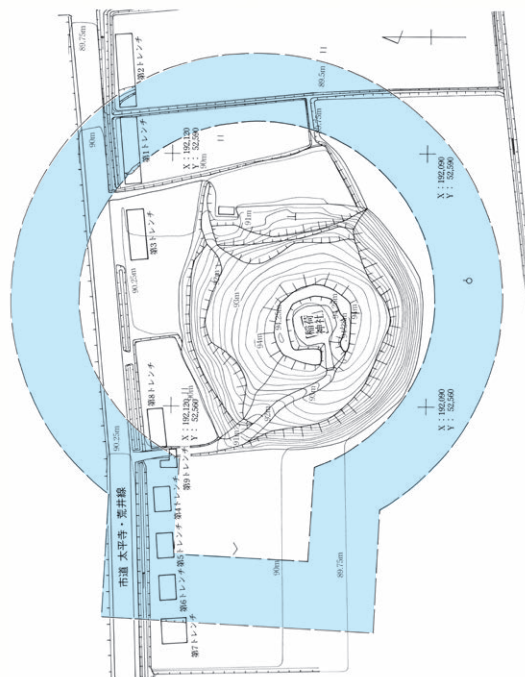
市内では最も大きな古墳ですが、同じ時期に直径68mの八幡塚古墳が国見町に造られています。稲荷塚古墳は、5世紀に造られた信達盆地第2位の規模の古墳です。

稲荷塚古墳、八幡塚古墳いずれも、奈良県にあった王権と関わりを持つ信達地方を治めた豪族の墓で、八幡塚古墳が信達盆地北部の有力者、稲荷塚古墳が信達盆地南部の有力者の墓と考えられます。

稲荷塚古墳の北側には稲荷塚古墳より新しい八幡塚古墳(下鳥渡)があります。全長45.5mの帆立貝の形をした古墳で、稲荷塚古墳に葬られた豪族の次に信達地方南部の有力者になった豪族の墓と考えられます。



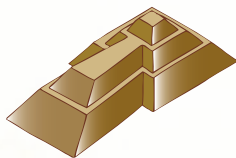
稲荷塚古墳付近図



26. 稲荷塚古墳の形 直径42mの円墳に11～16m 四角い張り出部がついた帆立貝の形をした古墳。青色の部分が古墳の周溝。



前方後円墳



前方後方墳



帆立貝形古墳



円墳



方墳

25. 古墳の形

コラム 前方後円墳体制

3世紀中頃に全長280mの前方後円墳である箸墓古墳が造られ、桜井市を中心とした地域で王権が成立しました。その後、王権の体制に入った各地の豪族により前方後円墳が造られます。箸墓古墳と同じ前方後円墳の形態を共有することで、奈良に支配の中心がある政治連合を形成したと考えられます。この政治連合は5世紀には東北地方から九州まで及び、弥生時代には地域ごとに異なっていた土器はこの時代に土師器に画一化されます。

頭椎大刀をもらった豪族の墓：月ノ輪山1号墳(鎌田)

月ノ輪山1号墳は、直径19.8mの円形の古墳です。石室は全長11.3mで市内で最も大きなものです。遺体を埋葬した玄室と玄室に通じる羨道からなっています。玄室と羨道から頭椎大刀が各1振出土し、耳環が玄室から13個、羨道から2個出土しました。その他に鉄鏃や直刀が出土しています。

中央王権から離れた関東・東北では、各地の豪族による軍事力を伴う支配が行われ、この支配に深く関わる豪族には中央王権から権威の象徴として頭椎大刀などの装飾大刀が与えられました。装飾大刀は中央王権との同盟関係を示すものであり、月ノ輪山1号墳に葬られた人物は、中央王権と軍事的な結びつきがあった豪族と考えられます。



月ノ輪山1号墳付近図



27. 月ノ輪山1号墳の全景 直径19.8mの墳丘の外に2.1～3.5mの周溝がめぐり、墳丘の高さは2.8m。



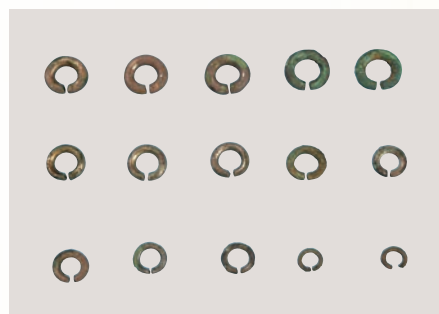
28. 石室 中央の石より奥の礫敷部が遺体を埋葬した玄室で石の手前が羨道。



29. 頭椎大刀 柄間金具の左端から刀身の切先までの長さ：65.9cm
(市指定有形文化財、市蔵)



30. 頭椎大刀 左の端から刀身の切先までの長さ：67.8cm
(市指定有形文化財、市蔵)



31. 耳環 銅で形を作り、銀板を張り金メッキを施している。左右の長さは1.8～3.4cm。(市指定有形文化財、市蔵)

東北最古の寺院：腰浜廃寺跡^{こしのはまはいじあと} (腰浜町)

福島大学附属中学校と福島東高等学校の東側に腰浜廃寺跡があります。東西23m×南北19mの金堂跡^{こんどうあと}と西側を区画する溝^{みぞ}が確認され、金堂跡周辺では多量の瓦^{かわら}が出土しています。腰浜廃寺が建てられた時の軒丸瓦^{のきまる}には、八葉の蓮の花の文様があり、百済救援^{くだらきゅうえん}のための朝鮮半島への遠征(661～663年)の後に建てられた広島県三次市の寺町廃寺跡^{みよしし てらまちはいじあと}の瓦と同じ特徴であることから、腰浜廃寺も同じ時期に建てられたと考えられます。東北地方で最古の寺院の一つです。



腰浜廃寺跡付近図

7世紀に信夫の地を支配していた豪族が建てた寺で、後に信夫郡の郡寺となったとされていますが、仏教により国家をまもる鎮護^{ちんご}国家政策の中で建てられたものと考えられます。9世紀の八つの花の弁の文様の八弁花文^{はちべん かもん}や花の文様が左まわりに回転しているような文様の旋回花文^{せんかい かもん}を文様とする軒丸瓦が出土しており、9世紀に建て替えが行われたと考えられます。



32. 腰浜廃寺が建てられた時の軒丸瓦 (市蔵)



33. 寺町廃寺の軒丸瓦 (広島県三次市教育委員会蔵)



34. 腰浜廃寺で平安時代に使用された軒丸瓦 (市蔵)

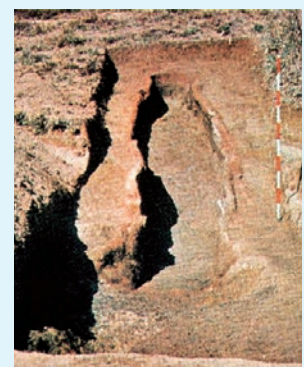
コラム 瓦を焼いた窯 - 宮沢窯跡^{みやざわかまあと} (岡島)・赤埴窯跡^{あかはにかまあと} (山口) -

奈良・平安時代に瓦は寺と役所で用いられました。瓦は今の登り窯のようなトンネル式の窯で焼かれました。良質な粘土と燃料となる木が確保できる場所で瓦を作り、窯で焼き上げました。

腰浜廃寺が建てられた時の瓦は、宮畑遺跡^{きゅうりょう} (岡島)の南側の丘陵にあった宮沢窯跡で焼かれました。昭和38年に5基の窯跡の発掘調査が行われました。

9世紀の建て替えで用いられた瓦は赤埴窯跡 (山口)で焼かれました。昭和39年の発掘調査で3基の窯跡が確認されています。

この他、三本木 (渡利)にも腰浜廃寺の瓦を焼いた窯跡の存在が確認されています。



35. 宮沢窯跡第4号窯跡

コラム

道奥国・陸奥国、信夫郡

6世紀以降、信夫国造により信達地方の支配が行われていましたが、649(大化5)年の天下立評(全国に評を設置する)により、国造が支配した地域は「評」という行政単位に編成され、土地・人を国家が直接支配する体制になりました。現在の福島市・伊達市・伊達郡の区域は信夫評となり、大宝律令(701年)により信夫郡になります。支配するための役所も置かれました。焼米が出土する五老内町周辺に役所に関する施設があったと考えられています。



36. 焼米

評・郡には大領、少領、主政、主帳などの役人が配置されましたが、国造の系譜を引く地元の有力者が任じられました。

なお、『常陸国風土記』には、孝徳天皇時代の654年に「足柄峠の東方に常陸国を始め8国を置いた」と書かれており、この8国の中に道奥国が含まれていると解釈されています。信夫評は道奥国に属し、道奥国は後に陸奥国となります。



焼米出土地点付近図

■が焼米出土地点

信夫郡の定額寺：西原廃寺跡(飯坂町湯野)県指定史跡

腰浜廃寺が建て替えられた9世紀に飯坂町湯野に西原廃寺が建てられました。昭和46年の発掘調査で金堂と考えられる21.14m×15.1mの建物跡とその南で13.9m×11.12mの建物跡が発見されました。いずれも基壇に礎石が配置された瓦葺きの建物です。

西原廃寺は、『類聚国史』に「830(天長7)年 山階寺(興福寺)の僧智興、陸奥国信夫郡に寺一区を造建す。菩提寺と名づく。定額寺の例に預る。」と書かれている菩提寺とされています。

9世紀に飯坂地区で勢力を伸ばした豪族が、権威の象徴として建てた寺で、定額寺の格式を得たものと考えられます。



37. 南方建物基壇(復元) 建物跡の北61mで発見された北方建物跡に残っていた痕跡をもとに、玉石積の基壇として復元されている。



38. 西原廃寺で使用された軒丸瓦 右上の瓦の中央部の旋回花文など腰浜廃寺の平安時代の瓦の影響が見られる。(市蔵)

注 定額寺 奈良・平安時代の寺格のひとつ。高僧・貴族の建てた私寺で官寺に準じ、500束(ないし1000束)の灯分稻(出挙により灯油料に充てる稻)が支給された。

豪族が製作した「木造千手観音立像」：大蔵寺(小倉寺)

『信達風土雑記』に「大同年間(806～810年)坂上田村麻呂が千手観音と千体仏を刻ませ、大堂を建て安置」とあり、坂上田村麻呂が小倉寺村に千手観音を安置する大堂を建てた記述があります。その後、小倉寺村と阿武隈川の対岸に位置する大蔵寺村にあった大蔵寺が小倉寺村の千手観音堂に移り、現在の大蔵寺になったとされます。

国の重要文化財に指定されている木造千手観音立像は、高さ4mの木彫で漆を塗り金箔で飾ったもので、高く髪を頭の上に集めて束ねた形や顔や体に力強い張りがあり、10世紀初めころにつくられたとされます。

9世紀に法相宗や天台宗・真言宗が地方の有力な豪族に広まり、10世紀にはその豪族による寺院建立や仏像製作が一般化します。大蔵寺の木造千手観音立像も信夫郡の中で経済力をもった豪族が製作し、観音堂を建てて安置し、現世利益を願ったものと考えられます。

大蔵寺には、木造千手観音立像のほか、木造聖観音菩薩立像1体、菩薩立像や如来坐像、金剛力士立像など26体の仏像があり、

県の重要文化財に指定されています。これらの仏像は9～11世紀に信夫郡の豪族により製作され、いくつかの寺院や仏堂に安置されていたものが大蔵寺に集められたものとされ、平安時代の豪族による仏像製作の様子を今に伝えています。



39.木造千手観音立像 高さ4m
の仏像は東北地方でも1,2番目の大きさ。(国指定重要文化財、大蔵寺蔵)



40.大蔵寺観音堂 信達三十三観音の第一番札所で、本尊として木造聖観音菩薩立像(県指定重要文化財)が安置されている。



41.木造金剛力士立像
(県指定重要文化財、大蔵寺蔵)

コラム 平安時代の仏教

830(天長7)年に山階寺(興福寺)の僧智興により西原廃寺が建立されます。興福寺は法相宗ですが、9世紀には恵日寺(磐梯町)などを建立した徳一が会津地方で法相宗の布教を行っています。西原廃寺の例から、福島市でも9世紀に法相宗の布教が行われたことがわかります。最澄が開いた天台宗は835(承和2)年、空海が開いた真言宗は、837(承和4)年以降に諸国への布教が行われます。福島県内においては、9世紀の後半に天台宗の布教が盛んになったとされ、大蔵寺も以前は天台宗であったといわれています。大蔵寺に観音堂が建立された10世紀には、法相宗や天台宗が福島市に根づいたと考えられます。

弥勒菩薩の衆生救済を願った「陶製経筒」：天王寺(飯坂町)

平安時代の中ごろには、釈迦の死去後1500年あるいは2500年で仏の教えが衰えて末法の世になり、1万年後には仏の教えが滅び荒れ果てた世の中になるとする末法思想が広がり、1052(永承7)年に末法の世に入ると信じられていました。末法の世は56億7千万年後に弥勒菩薩により救われるとされ、弥勒菩薩による世の救済のため、経典を容器に入れて伝えることが行われました。

天王寺経筒は、弥勒菩薩による救済のため経典を陶製の経筒に入れて土中に埋めたものです。経筒には下の文章が書かれ、1171(承安元)年8月19日に僧定心が藤原真年の費用により経典を納めたことがわかります。

福島県内では、平沢寺(桑折町)、米山寺(須賀川市)から天王寺経筒と同じ承安元年銘の経筒が発見されており、日付は8月28日と刻まれています。これらの三経筒の製作者名には白井友包、系井国数、藤原貞清、藤井末遠の4名が共通しており、経筒を専門に製作する集団が存在したと考えられ、弥勒菩薩による救済を願った経筒を埋めた経塚が数多く造られたことがわかります。



42. 天王寺陶製経筒

(国指定重要文化財、天王寺蔵)

敬白
奉施入
信夫御庄天王寺如法堂
大勧進聖人僧定心
大檀主藤原真年縁友作者代
同姓代 同姓代
小勧進 白井友包 系井国数
藤原貞清 縁友源代
藤井末遠 日田部貞家
小太良殿
仏子僧宴海 僧慶勢
稲石丸 僧龍鑒
源長宗縁友 犬子丸
右志者為慈尊三會之暁同令
一佛浄土往生也
承安元年歲次辛卯 八月十九日
取筆僧 長鑒

天王寺陶製経筒に刻まれている文字